【特集】地方を豊かにするキャンパスとオフキャンパス

ライトの愛弟子 遠藤 新の歴史建築を核とする、自然・人・建築が融合するキャンパスランドスケープ

景観建築学科を新設した武庫川女子大学

ランドスケープと建築を一体的に学ぶ。これまでの日本には存在しなかった、新しいカリキュラム体系を持つ新学科が誕生する。2020 年 4 月、武庫川女子大学は、女子大初の建築学部と日本初の大学院建築学研究科を同時開設し、既存の「建築学科」と新設される「景観建築学科」の 2 学科体制となる。キャンパスは、フランク・ロイド・ライトの愛弟子、遠藤 新（えんどう あらた）の設計による「甲子園会館（旧甲子園ホテル）」を回遊式庭園が囲む美しい環境を誇る。さらに、学内に設置された一級建築士事務所の設計により新学科の校舎 2 棟が建設されるなど、自然・人・建築が織りなすキャンパスランドスケープの創造が進む。



上甲子園キャンパス全景（建設中の景観建築学科の新校舎 CG を合成）



甲子園会館全景

景観建築学＝ランドスケープ教育＋建築教育。画期的な新学科が誕生。

これまで、武庫川女子大学建築学科は、学士課程と修士課程をあわせた 6 年一貫の世界水準の建築教育を展開してきた。欧米型の設計スタジオを核とした演習中心の建築教育は、建築系カリキュラムの中でも実践的かつデザイン的であることで定評を持つ。この蓄積をもとに、新たにランドスケープ教育を建築教育と一体化し、今春、「景観建築学科」が誕生する。「景観建築」はあまり耳慣れない言葉だが、米国で生まれた Landscape Architecture の概念を端的に表現している。この学科の最大の特徴は、ランドスケープと建築を一体的に設計できる人材の輩出を目指すことだ。



かつての食堂は現在、建築学科1年生のスタジオ（製図室）として使用されている



甲子園ホテル時代の食堂　ライトのスタイルを受け継いだ意匠が随所に見られる



甲子園ホテル時代の南外観　当時は南側に大きな池があり、宿泊客は船遊びを楽しんだ

建築家ライトの愛弟子 遠藤 新が目指した景観建築

景観建築学科の学びの舞台となる上甲子園キャンパスは、美しいディテールと空間構成を持った名建築「甲子園会館」を核とし、池を巡る園路沿いにシダレザクラやクロマツ、芝生広場やサツキ、茶席などが配された回遊式庭園が囲む。クスノキ林や竹林も相まって、美しいキャンパスランドスケープを醸し出す。設計当初、遠藤は建築の配置について、―「扉を押して佳人が現れるように松並木を開いて建物が建つ」。さらに池の存在に対しては「緑の屋根は層より層に静かに水に近づく」というイメージを描いた。武庫川の河畔の敷地というコンテクストに対する読解と応答により、深い屋根が重なった先に池の水面が広がるランドスケープが創造された。遠藤もまたランドスケープと建築が一体的なものだと考えていたのであろう。

校舎・森・庭園
キャンパスすべてが " 生きた教科書 "

◆甲子園会館の瓦の制作と葺き替え

景観建築学科 1 年生・前期の「表現基礎演習」では、甲子園会館独特の緑釉瓦を伝統的な手法「1 枚づくり」で復元する。京瓦職人・浅田晶久氏の指導のもと学生全員で粘土を足で踏みながら直方体に盛る「タタラ盛り」からはじまり、それを瓦 1 枚分の大きさの粘土板に切り分け木型にのせて成型、乾燥後に釉薬をかけて焼成。最後は会館の屋根に上り、葺き替えまでの一連の流れを体験することで、歴史的建造物の保存・修復の技術を学ぶ。



瓦 1 枚分の荒地（粘土板）をたたき締めながら成型



瓦葺職人・光本大助氏の指導を受けながら葺き替える

◆甲子園会館の透視図

甲子園ホテルは、武庫川の河畔に広がる松林と池の端に建設された。建物南側にはクロマツが現存しており、ホテル時代の面影をしのぶことができる。当時の客室は現在、建築学部の講義室となっている。1 年生では、空間知覚表現の理解を深める課題として、甲子園会館を題材に透視図を描く演習も行う。建物全体のプロポーションと共に、日華石のレリーフや装飾タイルの細やかな意匠、樹木を観察し、プレゼンテーション能力を養う。



透視図法を学びながら、建築パースを習得する



学生の作品



茶道体験



庭園内にある茶席と露地

◆茶席と露地

1990 年に、甲子園ホテル築後 60 年の大改修工事が実施された。雑木林となっていた前庭も茶席を中心とした回遊式庭園として整備された。「自妙庵」と名付けられた草庵式四畳半の茶席のほか、本格的な茶会のための待合、四季を楽しめる茶庭も設えられた。景観建築学専攻修士課程の設計演習では、この庭園を教材に茶室と露地の設計に取り組む。

◆晩秋の風物詩「甲子園会館ライトアップ」

毎年 11 月末の週末に、甲子園会館とキャンパスの庭園をライトアップし、一般に開放している。庭園の池端にはイロハモミジを中心とした広葉樹が植えられており、その紅葉の状況を見極めながら、学生たちが投光器を各所に設置、キャンパス全域に光の空間を演出する。クリスマスシーズンの恒例イベントとして定着し、毎年多くの見学者が訪れる。



照射する樹木や方向などを検討しながら投光器を設置



水鏡となった池には幻想的な風景が映し出される

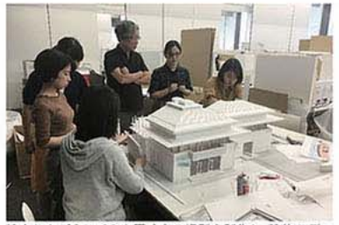
学生が新校舎建設プロジェクトに参画

甲子園会館やキャンパスの自然環境と共鳴する 2 つの新校舎

大学院建築学研究科の授業「建築設計実務」では、学内に設置された一級建築士事務所「武庫川女子大学 建築・都市デザインスタジオ」を拠点として、新築・改築・保存・修復などの実務訓練を行う。事務所は建築学部所属の教員で構成される。現在は建築学専攻の大学院生が、教員とともに景観建築学科の 2 つの新校舎の設計・監理に従事している。既存の校舎と調和するデザインを探求すると同時に、キャンパス内の緑地保全や整備にも取り組んでおり、学科の理念を象徴する理想のキャンパスが生まれようとしている。



新校舎・西棟（仮称）：クロマツやクスノキの大木のある中庭を挟んで、建築スタジオと対面する景観建築学科のためのスタジオ棟。両建物のプレキャストコンクリートの列柱が、景観に軽やかなリズムを生み出している。景観建築学科 2 年生以上のスタジオ（製図室）のほか、講評室やラウンジを備える



協力しながら 1/30 や原寸大の模型を製作し、建物のディテールを検討する



新校舎の外装材とするために、陶芸家・南野馨氏の指導のもと甲子園会館の装飾タイルを復元



新校舎・東棟（仮称）：甲子園会館と呼応する、大きな屋根と庇のある外観を持つ景観建築学科の校舎。緑釉瓦や石、装飾タイルなどの伝統的材料が現代建築に取り込まれ、優美なデザインを実現



東棟（仮称）にある景観建築学科 1 年生のスタジオ



1 人 1 台専用の製図机とパソコンを備えたスタジオ

各学年のスタジオ（製図室）には、入学から卒業まで自由に使える個人専用の畳 1 帖サイズの製図机とパソコンを完備している。この充実した教育環境の中で、午後の演習では学生と教員が一対一の対話をしながら設計課題に取り組む。学生 40 名に対し教員 3 名で指導することで、個人の表現力や創造力、問題解決力を引き出すきめ細やかな授業を行う。

持続可能な社会に貢献できる「景観建築設計者」を育てる

自然・人・建築の共生をデザインする「景観建築学」



岡崎 甚幸
建築家
武庫川女子大学教授
建築学部長・建築学研究科長
京都大学名誉教授

「Architect（建築家）」の語源は、古代ギリシャ語の「arkhitekton（ものごとの原理や根本的な知識を備えた上で、技術者たちを指導し、技術を統合して、制作を企画しうる能力を持つ者）」です。建築家は、歴史、芸術、力学、音、熱、光、自然環境など幅広い知識と技術を持って、プロジェクト全体を統括します。建築設計も造園もアーバンデザインも本来、建築家の職能でした。しかし、現代では学問としても職業としても分化が進み、それらの間に隙間ができてしまいました。環境破壊とそれに伴う自然災害、エネルギー問題などが深刻化する現在、真に美しく豊かな住環境を創造するために、それらの隙間を埋めて一体的に取り組める人材が必要です。建築家の本来の語源にならい、造園や園芸、景観映像情報技術などの幅広い分野を総合して建築を学び、自然との共生をデザインする。それが「景観建築学」です。



一級建築士とRLA（登録ランドスケープアーキテクト）を保有する「景観建築設計者」の育成



杉浦 徳利
武庫川女子大学教授
景観建築学科長・
景観建築学専攻長

実際の建築設計の仕事では、単に建物を設計するだけでなく、広場や庭も含めた敷地全体もデザインします。ランドスケープアーキテクトと協働しながら屋外空間を設計することもあります。

建築と庭園を融合した美しい空間を設計するには、建築技術だけでなく、植物の特性や演出方法、管理技術などの知識も必要になってきます。

日本でも持続可能な開発目標（SDGs）「住み続けられるまちづくりを」「気候変動に具体的な対策を」といった国際目標に対し、デザイン提案できる設計者が求められています。しかしながら、広い視野を持ち、自然との共生を考えながらマルチに活躍できる設計者は、まだまだ少ないのが実情です。そのため、構造・規模・用途に関わらず全ての建築物について設計・工事監理を行うことのできる一級建築士と、景観や環境デザインのプロフェッショナルであるRLA（登録ランドスケープアーキテクト）の両方の職能を併せ持つ「景観建築設計者」の育成がもとめられています。

全授業数の半分以上を占める少人数制対話型の演習による徹底したデザイン教育

午前中は講義、午後は各学年専用のスタジオやアトリエで一斉に演習に取り組む。演習科目は実に、全授業時間の半分以上を占める。学部1年生前期は、いけばな、絵画、陶芸など多種多様な造形作品を制作し、感性と創造力を徹底的に磨く。1年生後期から本格的な問題解決型の設計演習が始まり、庭園や広場、街路などのランドスケープと建築の設計が一体化した課題に取り組む。設計演習の各課題ごとに講評会を実施し、2日間かけて学生全員の作品発表と講評をおこなう。



表現基礎演習　いけばな



ランドスケープと建築の設計に一体的に取り組む



図面と模型を使って各自のアイデアを発表する



「景観建築」の概念図



京都・智積院でのフィールドワーク

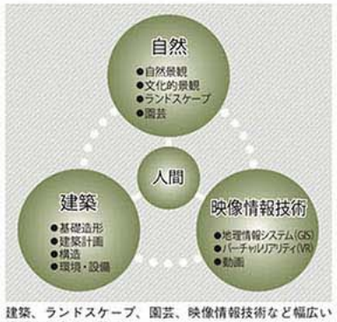
「見て、触れて、学ぶ」フィールドワーク

演習や講義に関連した敷地、歴史的建築、現代建築、保存修復の現場、環境配慮型建築、建設現場、庭園、街並みなどを見学し、担当教員や学外の専門家から説明を受ける。これらを通して知識や技術を具体的に理解し、実践的な力を養う。

景観建築学科のカリキュラム

「ランドスケープアーキテクト＋建築家」を目指す

建築学に加えて、公園・都市など景観に関する専門知識を継続して体系的に学ぶ。日本・世界の建築史や庭園史、自然環境保全の理念を理解した上で測量、都市計画、景観緑地計画などの方法・技術を体得するカリキュラムとなっている。高度な映像情報技術が学べるのも特徴である。ドローン、バーチャルリアリティー、地理情報システム（GIS）などを活用し、建築や景観の分析・設計に取り組む。さらに、景観を設計する上で欠かせないのが植物に関する知識である。景観建築学科には専用の園芸実習場があり、1年生から3年生までが継続的に植物栽培実習に取り組む。植物の経時的、季節的変化を実践的に学び、自然・人・建築の豊かな関係を創造できる力を身につける。RLA（登録ランドスケープアーキテクト）の指定学科であると同時に一級建築士の学歴要件を満たす。



建築、ランドスケープ、園芸、映像情報技術など幅広い分野を総合的に学ぶ



北摂キャンパス演習林でのフィールド調査



高度な映像情報技術を実践的に学ぶ

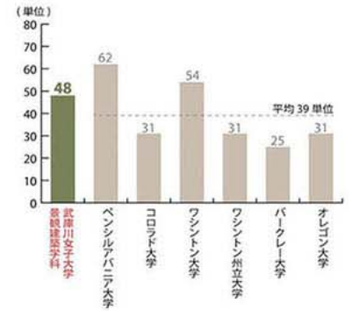


3年間にわたる充実した植物栽培実習

欧米のランドスケープアーキテクチュア学科並みの演習時間を確保

さまざまな知識を統合し美しい景観を創造する力を養うためには、設計演習が不可欠である。ランドスケープ教育の先進国、米国の主なランドスケープアーキテクチュア学科における演習の単位数は平均で39単位※と報告されている。これに対し景観建築学科の演習単位数は48単位※と大きく超えており、質・量ともに世界水準のデザイン教育であることがわかる。

（※学部卒業に必要な演習単位数）



米国の公立大学ランドスケープアーキテクチュア学科と武庫川女子大学景観建築学科の演習授業単位数の比較

（「三谷 徹，ランドスケープ学教育におけるデザインスタジオ演習の可能性 ・その位置と強度・，造園学会ランドスケープ研究，vol.83(2)，pp96-99，2019年7月」にもとづき武庫川女子大学 景観建築学科の情報を追加して作成）

欧米型デザインスクール形式の大学院修士課程

修了生全員が一級建築士の免許登録に必要な「実務経験2年」を満たす実践的教育

景観建築学科と同時に開設される大学院景観建築学専攻修士課程では、欧米型のデザインスクール形式の教育を実践。入学時に専門分野別の研究室に配属される研究中心型の大学院とは異なり、大学院生全員が共通の課題に取り組む。研究室の垣根なくさまざまな教員から指導を受け、実践的な演習に取り組むことにより各自の実力を伸ばすことができる。また、必修のインターンシップ科目で学外の設計事務所や施工現場などでの実務研修を受け、さらに学内に設置されている一級建築士事務所で実際の建築・景観設計プロジェクトに参加し、実務訓練を積むことができる。

これらのカリキュラムは「実務経験2年」と同等と認められており、修士課程修了生全員が一級建築士の免許登録に必要な実務要件を満たす。

RLA（登録ランドスケープアーキテクト）の「実務経験2年」も充足

景観建築学科および景観建築学専攻修士課程の教育内容は一級建築士の資格のみならず、RLA（登録ランドスケープアーキテクト）の資格取得にも対応している。修士課程のカリキュラムはRLAの資格取得に必要な「実務経験3年のうち、2年に相当する」と認められている。武庫川女子大学景観建築学科および景観建築学専攻修士課程は一級建築士とRLAの両方の資格取得を目指せる、これまでにない学科・専攻といえる。



学内の一級建築士事務所と連携した「建築設計実務」企業の工場の庭園設計



大学院生が施工に参加し、竣工した庭園